

インド更紗の製作地と絵画様式の関連性—人物文様を中心に—

沼沢ゆかり（東京国立博物館）

日本で「さらさ」と称される染織品は、平織の木綿地に染めを施した舶載の裂を指す。とりわけインド更紗は香辛料交易の対価として用いられ、スパイスの産地であったインドネシア各島をはじめ、ヨーロッパや日本にも多くもたらされた。その製作地としてはインド北西部のグジャラートや、東南部のコロマンデル・コーストがあげられ、とくに前者は木版更紗、後者は手描き更紗の生産地として名高い。更紗の作例解説を含め、先学では染色技法や文様から製作地が推定されるが、とくにインド国外への輸出向け更紗に関し、根拠となる具体的な資料が示されていない例も認められる。また、両地域では木版と手描き技法を併用していた可能性もあり、あらためて文様表現への着目が求められよう。本発表では、人物文様更紗を中心にその文様の特徴を明らかにし、インド各地方の絵画資料と比較することで、今一度、製作地の判断基準を検討することを目的とする。

15世紀製作の九州国立博物館所蔵「藍地人物文更紗儀礼用布」をはじめとするインドネシア伝世の人物文様更紗には、鋭い鼻に輪郭から飛び出た眼といった特徴的な容貌が認められる。これらの表現は、14世紀から16世紀前半のグジャラートなど、北西インドで描かれた絵画に類似する。東インド会社の介入以前よりグジャラートのキャンベイ、スーラトは貿易の要港であり、製作から輸出までの流れも十分に想定される。なお、16世紀後半以降の北西インドの細密画では容貌の特徴に変化がみられることから、地域だけでなく時代にも連なるモチーフの表現様式が更紗に反映されていると考えられる。

また、九州国立博物館所蔵「ラーマーヤナ描繪更紗」は、3世紀頃に成立したサンスクリット叙事詩『ラーマーヤナ』の戦闘場面を表した作例である。本作については17世紀から18世紀製作と推定される21点の類例が確認でき、インドネシア輸出向けとして一定数製作されたことがうかがえる。釣鐘形の宝冠に先端が巻かれた口髭や、ふくらみを帯びた四肢、鋭く張り出した腰衣は17世紀から18世紀に描かれたインド南部、タミル・ナドゥの壁画に認められる特徴である。また、ハヌマーンなど猿の表現も尾の形や顔の特徴が類似しており、人物像以外においても関連性が指摘できよう。このような人物像の特徴は東京国立博物館所蔵「彦根更紗」の一部にも当てはまり、前述の特色は断片の作例に関しても考察の手掛かりになると考えられる。17世紀以降、オランダやイギリスをはじめとした東インド会社はコロマンデル・コーストに次々に商館を設置した。世界的な更紗人気の高まりにあわせインド南部で多くの更紗が製作され、それらに同地域の絵画様式が影響した可能性は高い。

現状、製作者や文献資料との紐づけが難しいインド更紗において、他媒体の作品との考察は作例検討の端緒になりうる。更紗の文様表現と各地域の絵画様式が地続きであることをあらためて指摘したい。